

絵本の読み聞かせスタイル

—就寝前の読み聞かせ場面における母子の対話分析から—

○藤岡真貴子 無藤 隆
(お茶の水女子大学)

秋田喜代美
(立教大学)

【目 的】

子どもへの絵本の読み聞かせは家庭で日常的に行われているが、その読み聞かせ方は各家庭で異なっているのだろうか？ また異なっているとすればどのように異なっているのか？ 著者らは、3～4歳代の子どもを対象に母子の対話分析を行い、各家庭で特徴的な読み聞かせのスタイルがあることを示したが(藤岡他, 1994保育)、本研究では引き続き、スタイルの内容と安定性を検討していく。

【方 法】

(1)対象児: 3～4歳代の子ど4名(男女各2名)とその母親(但し、場面にはきょうだいも参加している)。
(2)収録方法: 家庭で日常的に行われている母親による就寝前の読み聞かせを1年間(11月～7月)に収録。
(3)分析方法: ①分析資料の抽出: 絵本1冊あるいは1章を単位とし、各月齢に5冊ずつ計60冊を抽出。
②分析方法: 「対話」を単位として、その内容と構造(a インシティブ・b 応答性)を分析。具体的には、絵本1冊毎に音声記録を逐語的におこし、対話に分け、対話カテゴリ(藤岡他, 1994保育 参照)に分類、対話構造を評定→すべての変数の総対話数へ占める割合(%)を算出→どの変数どの対象児においても、絵本毎のばらつきが大きかったため、1冊の絵本の読み聞かせを独立した変数として捉え、「総対話数に占める各変数の割合(%)」を10%を単位とし、頻度(すなわち冊数)を算出→ χ^2 検定を行い、4家庭の比較によってスタイルを抽出→スタイルの安定性を見るため、各家庭を4カ月ずつ3期に分け、同様に分析。また総対話数への割合をもとに分析を進めたため、総対話数が10以下と少ないものは分析から除外(分析対象の絵本数: A児:42, B児:47, C児:60, D児:46)。

【結果と考察】

Table 1 に、藤岡他(1994保育)で取り出した読み聞かせのスタイルを示す。このようにスタイルは読む絵本の種類を反映しているが、本研究では、更に対話内容と構造から、その特徴を検討していく。

Table 1 読み聞かせのスタイル

自己投影型(A児) 興味中心型(B児)	日常生活を描いた等身大絵本を好んで読む 図鑑を好み、ストーリー絵本の場合も自分の興味の関心(電車)から独自の捉え方をする。
ファンタジー型(C児) 鑑賞型(D児)	ファンタジー性の高いストーリー絵本を好んで読む。 少し難しめの挿し絵の少ない童話の本を静かに聞く。

(1)対話内容: Table 2 に対話内容の χ^2 検定結果を示す。このように、A児には、自分を登場人物に当てはめたり、逆に絵本世界を自分と関連づけた

り登場人物と自分を対比する対話が多く、また自己関連づけが高いためか、主観表出も多い。B児は、図鑑を読むことが多いため、ストーリーよりも絵の確認が多い。但し、絵の説明だけではなく、日常生活や自分自身、一般的な事柄等に広く対話が展開している。C児は、日常とは離れたファンタジー絵本を読むことが多く、現実と絵本を関連づけるのではなく、視点を絵本に置いて登場人物に自分を当てはめることが多い。また、客観的に登場人物の確認をしたり、ストーリーを先取りしたりすることが多い。D児の家庭では、読み聞かせの時間が静かに物語を聞く時間として定着しており、全体的に対話数が少なく、絵本読みのルール・ストーリー、中でも開始や終了、次回に読む本に関する対話が多くなっている。

Table 2 「対話内容」の χ^2 検定による分析結果及び特徴
カテゴリ χ^2 値 特徴

1. 絵本読みのルール・ストーリー	41.66***	D+
①絵本読みの開始・終了	48.82***	D+
②絵本の扱い方・ページの開き方	6.88+	A-
③作家と画家に関して	16.69***	A+
④絵本の読み方、見方に関して	35.64***	B+, C+
⑤次の章、次に読む本に関して	24.43***	D+
3. 絵本の内容理解を促進する対話	30.83***	B+
①登場人物の確認	13.80**	C+
③絵	20.73**	B+
4. 絵本の文脈や内容理解から離れ、自分を中心に展開する対話	34.07***	A-, B+
①ことは	10.14**	A+, C+
③登場人物への当てはめ	41.04***	C+
④記憶によるストーリーの先取り	41.04***	C+
5. 子どもの現実世界と絵本場面を関連づける対話	3.25***	C-
①日常生活・過去体験	20.43**	B+
②自分	14.64+	A+, B+
③他の本・映画・TV・劇等との比較	15.54+	B+, D+
④一般事象	24.69***	B+
6. 主観表出	51.49***	A+
①感想	11.01+	A+
②意見(絵本に向けられる発話)	39.34***	A+
④笑い(単独に生じたもの)	26.24***	B-
⑤母親による子どもの動作の説明	20.58***	A+

(注1) +p<.10, **p<.05, ***p<.01, ****p<.001.

(注2) 下位検定は行わなかったが、子どもの間で比較し、特に頻度の多いものを+、少ないものを-として特徴の欄に記載した。

(2)対話構造: ①インシティブ: 母親、対象児、きょうだいのいずれにも有意差が見られ、B児の母親、C児本人、D児のきょうだいインシティブを握る傾向大。
②応答性: 他の参加者がいないものはA児、ターン数1回の2者間対話はC児、ターン2回以上の2者間はB児とD児、全員参加はD児に多い。このような構造における家庭差は、絵本よりも、参加メンバー(きょうだいの年齢等)によって規定される所が大きいと考えられる。
(3)スタイルの安定性: 内容、構造のどの変数においても3期とも全体で見られたスタイルの傾向が認められた。
(4)まとめ: 3～4歳代は、それまでの読み聞かせで形成された各家庭のスタイルが維持されている時期といえる。今後の課題として、スタイル形成に強い影響を及ぼす、絵本の種類、読み聞かせへの参加者、発達の時期を、更に考慮し検討することが必要。